

## 飛鳥奈良時代の文化綜説

〔飛鳥奈良時代の文化・序文〕昭和二十八年初夏の頃、關西經濟同友會文化部長の武田長兵衛君から、その部會の事業の一つとして、飛鳥奈良時代の文化について數回連續の講演會を開きたいから、然るべく企畫してほしいとの依頼を受けた。その意圖を推測して見ると、現時のわが國の文化の様相について疑問と不安を懷き、これに對處するために、古來日本文化の發展して來た跡を知りたく、順序として先ずその著しく開發せられた飛鳥奈良時代の概要に通じようとするにあるようである。經濟面に重きをなす人々の間に、かかる希望の生起することは欣快至極のことであり、自分は直ちにこれを應諾したのである。

更めていうまでもなく、この時代の文化について論述したものは、國史に關する知識の淺い自分の知る限りにおいてすら、殆んど擧げ切れないほどに多いのであつて、これらを通覽すれば當面の目的を達することが出來、特にこのために講演會を開くにはおよばないようにも思われる。しかしながら、これら多數の述作を一々目を通すことは、専門家ならぬ一般知識人に、容易に望まれることではなく、やはり適宜の方法としては、これら多種多様の述作に通曉し、その上に自己の見解を確立している専門家の説を聽聞することを第一の階段とすべきであらう。

ところで同じく飛鳥奈良時代の文化を理解するに當つても、その所見は人によつて相異り、心ずしも一致していない。當代におけるその顯著な進歩・發展が、先進の外國文化、即ち隋・唐文化の輸入された影響によると見ることにおいては、勿論何人にも異論のないことであるが、その影響の程度如何が人によつて見解を異にする主要なる點であり、そこに重要意義が存するのである。これを正しく理解するためには、廣く和漢兩方の史實に通曉するを要すると共に、苟も觀念的な史觀に陥ることな